

Title	左右田喜一郎著 文化価値と極限概念
Sub Title	
Author	勝本, 鼎一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.8 (1922. 8) ,p.1198(150)- 1200(152)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220801-0150

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

夫れを包含した所屬の自然科学から借用せられるやうに思はれる。(註八)

右は後段に細説する所と非常な關係を有するし、又私も聊かながら補足する所があるから、特に注意を要する。然らば上來縷述した所に基つて、ミルの與へた經濟學の定義とは如何なるものであり、而して彼が夫れを如何に論證したかは、紙面の都合上次回に譲る。

(註一) J. S. Mill, Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy, pp. 123-4.

(註二) op. cit., pp. 124-5. 因に家内經濟よりの類推に依つて經濟學に定義を與へたものに Mrs. Marcet's Conversations on Political Economy, 1817. があつた云ふが、私は未だ夫れを一讀しないから、唯だあると云ふ小語だけに留めて置く。(J. Bonar, Philosophy and Political Economy p. 242, note.) 併しミルの父たるシエーム・ミルが、其著經濟學要論の開卷劈頭に於て、經濟學に與へた定義は、明かに其子シエーム・ミルの批評を受けざるを得まいと思ふ。
James Mill, Elements of Political Economy, 1821, P. 1.
(註三) J. S. Mill, Essays, pp. 125-6.

等が認識機關の約束に依るものなることを以てし、自然科学對歴史科學の二元的科學論あり得る所以を主張し、延ひて經濟生活を對象となす經濟學は、其の認識目的非合理的なる認識素材に制約せらるものなるが故に當然歴史科學に屬さるべからず、而して「經濟學の認識目的に内容的決定を與ふる das äussere Merkmal は貨幣概念にして之に Beugnahme することによつてのみ經濟學に特殊なる認識目的は吾々の認識の上に表はれて來、之によつて經濟生活は一種の歴史生活として他の人類生活と區別せらるゝに至る」而かも「經濟現象が人類生活全般の一面的解釋として可能となり而して經濟學の對象となり得る爲には一般的文化價值——歴史的生活の中心思想たる Kultur によりて制約せらるゝを要すとの意味に於て、即ち一の論理的當爲としての——に係て其の存在を見而して尙又之と區別せられて特殊の存在を認め得べき者でなければならぬ。即ち文化價值の内、殊に經濟的な或特有なる價值に bezeichnen せられて初めて經

- (註四) J. S. Mill, Principles, p. 9.
- (註五) J. S. Mill, pp. 127-9.
- (註六) op. cit., pp. 129-32.
- (註七) ミルは、前掲論集の第二の論文に於て、消費が生産の上に及ぼす影響を論じて居るが、是れは他日紹介する積りである。
- (註八) op. cit., pp. 132-3.

新刊紹介

左右田喜一郎著「文化價值と極限概念」

菊列四八四頁
定價 參圓
岩波書店發行

科學的認識の二元性を立するに、方法的形式的單純なる經驗的認識主體の Auffassungsfeld に求めんとするリッケルトの所説を正しく解することに因て开を超越して「認識對象其自身に於て合理的なるものと非合理的なるものとが終極に於て分離せられざるべからずと云ふ吾

濟生活は我等の認識に上り來りかくして抑も經濟生活は可能となる。此の如き論理上の Sollen は經濟生活が人類生活の一方面的解釋なりとの理由により「經濟的文化價值」と稱すべきである」と論じ、經濟學の可能を立證すると同時に全科學體系に於ける其の地位を決定したる左右田博士の學的功績は其の名著「經濟哲學の諸問題」と共に既に周知の事實である。

「文化價值と極限概念」は博士の第二論文集にして博士其の後の思索的産物の集成である。收むる處、篇を分つて二となし第一篇は「價值哲學研究」にして、價值哲學より觀たる生存權論、文化主義の論理、價值の體系、個別的因果律の論理、附するに平等主義の一考察、價值生活としての人生、及び個別的因果律の論理に關する田邊博士の質問並に之が應酬等より成り、第二篇には、極限概念としての文化價值、合理性對非合理性の問題を通じて觀たる「極限概念の哲學」等を收め題して「極限概念の哲學研究」とす。會て「經濟哲學の諸問題」に於て學び而して

尙は未解のまゝに残されたる根本問題、即ち經濟學認識論の抑も可能となり得る從て經濟學に論理上の前提を與へ、經濟學の對象をして可能ならしめ、又かくて經濟生活の向ふ歸趣、目的、意義が依て以て其の認識論上の重要決定せられ得べしとする經濟的文化價值若くは文化價値の性質、構造、重要及び一文化價値の他の文化價値に對する關係如何等、換言すれば經濟哲學の根本問題は透徹なる論理によつて本書の中に遺憾なく展開せられてゐる。所謂經濟學の上限下限は本書を俟て初めて一貫的に明かにせられ得たものと云ふことが出来ると思ふ。當然第一論文集と併せ讀まらるべき書である。

本書は是れ固より純然たる哲學的勞作として哲學界に將た又思想界に當然獨特の地位を占むべきものなるも此處には經濟學の關心事とする方面に即してのみ其の重要さに就て述べた。若し夫れ本書が類稀なる眞理に對する燃ゆるが如き思慕の熱情と論理に對する嚴肅なる態度の餘になれるの事實に至ては著者自らの言葉を以

て語るに如くはない。而して是れ本書の有する意義と價値とを最も端的に語り得るものなりと思ふ。著者は言ふ「如何なる學問研究者も彼が嚴肅なる學的良心を有する限り自らの研究する當面の問題について假令一段落を告げ得たと思ふときでも常に其の内には更に解決を要すと思惟する根本問題の残されて居ることを思はぬものがあるであらうか。そして此の如き根本問題の更に深き考究によつて前きに段落をつけ得たと思はしめた問題の意味を一層明にし之を補足せしむるに至らざるものがあるであらうか。此の意味に於ては如何なる研究と雖も自足完了の狀態に至るといふことを以て常に一個の永久に實現することを得ざる理念とせざるを得ないのであらう。……著者は未だ嘗て彼が發達する如何なる研究に於ても此の念ひに煩はされざるものは殆んどない。然れども彼は寧ろ之に依つて私かに研究者たるの光榮と誇とを感じつゝあるものである」と。讀過せらるるに畏敬尊崇の念を禁め得ない。(勝本鼎一)

福田徳三著 社會運動と勞銀制度

四六版本文三九七頁
定價金三圓九十錢
東京改造社發行

福田博士の近業「社會運動と勞銀制度」一篇は「社會運動の理論的根據」「勞働爭議の意義及び種類」並びに「勞銀制度」の三編から成る。何れも昨年の講演速記である。第一編は本年二月に刊行せられたる「社會政策と階級闘争」(本誌三月號新刊紹介欄参照)の第一部「社會政策序論」を基礎として通俗的に講演せるものである。我々は人格生活、經濟生活の二方面を有する。人格生活は無限に伸張せんとするものである。然るに經濟生活には幾多の制限があり、其の制限は軀がて人格の支配關係を産み出す。殊に今日の流通經濟生活に於ては其の支配關係が甚だ有力にして廣汎なるものと爲る。就中、土地、貨幣及び企業三者中、其の三種又は二種の所

有を併有する企業者が雇傭勞働者に對する支配關係は極めて廣汎且つ有力にして又た濃厚なるものである。從つて其れが爲めに被る人格生活の制限、人格の支配的壓力は甚だ大なるものである。經濟生活と人格生活との衝突は此の企業資本對雇傭勞働の關係に於て最高頂に達してゐる。個人其の儘の生活は人格の孤立を意味する。固より孤立者には他の人格の壓迫は存しない。其の代りに財の生活の壓迫、即ち非人格性自然の壓迫を受ける。是れより免るゝの道は個人の生活を社會化して、共同生活を營むことに由つてのみ得られる。社會化せる共同生活に在つては人格と人格との間の衝突が起る。國家は此の共同生活の最高なる形態として現れ、人格と人格とが互に相接觸して一つの人格が他の人格を壓迫することなきを勉める。若し個人が個人としての自由のみを主張するならば其の極は社會の破壊と爲る。社會を破壊して了へば他の人格の壓迫を受ることがなくなる。而も其の代りに財の生活の更らに大なる壓迫を受ける。個體